

あれから2年②

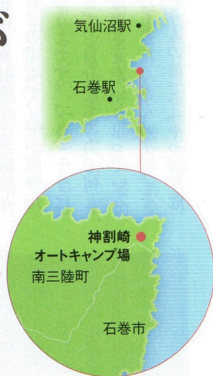
読者から届けられた衣類が 南三陸町の神割崎で 手渡されました。

2012年12月号で筆筒の肥やしになっている
衣類の活用法としてご紹介した、岩手の企業が行う被災地支援の取り組み。

たくさんの反響をいただき、ありがとうございました。

そこで今回は、みなさんから届けられた衣類を
手渡し現場を訪ねてきました。

取材・文=中嶋信次(編集部) イラストレーション=内田コーイチロウ 撮影=中西裕人(編集部)



自分のものだけでなく、仕事などで来られない家族や近隣の方の分まで、袋いっぱいを選んでいました。

「このバッグはお菓子入れにするの」と笑っています。

「この色、あなたに合いそうね」「旦那さんの物は選んだの?」と賑わいました。「これからさらに寒くなるので、暖かめの上着を探しにきました」という須藤トメノさん(88歳)はセーターをいくつも着込むため、腕回りが少し大きめの黒いダウンを見つつけ、「いいのが見つかった」と試着。首に掛けた短めのスカーフが見えるよう結び直して、うれしそう。「ふだんは仕事に出ている」という女性2人は、選んだ小さめのバックを見せながら、「やっぱり休憩時間はお菓子が入れる」

**お菓子をを入れる
バッグを見つけました**
寒さも厳しい年末。会場となった宮城県にある神割崎オートキャンプ場には、開場前から行列ができ、100名以上が集まりました。
この日、届けられた衣類はダンボールで約120箱。コートやセーター、暖かめの下着など、冬物を中心に所狭しと並べられた前で、「この色、あなたに合いそうね」「旦那さんの物は選んだの?」と賑わいました。「これからさらに寒くなるので、暖かめの上着を探しにきました」という須藤トメノさん(88歳)はセーターをいくつも着込むため、腕回りが少し大きめの黒いダウンを見つつけ、「いいのが見つかった」と試着。首に掛けた短めのスカーフが見えるよう結び直して、うれしそう。「ふだんは仕事に出ている」という女性2人は、選んだ小さめのバックを見せながら、「やっぱり休憩時間はお菓子が入れる」

また、会場脇には、読者からの手紙を貼ったコーナーも。「被災地への古着の支援を『いきいき』」で見て、少しでも私の物が役に立てばと送らせていただきます」

「Sサイズばかりですが、どなたかに気に入ってくだされば、お体にお気をつけください」。支援を行う古着販売店・ドンドンアップには、昨年11月1日だけで読者から約2000個口のダンボールが届き、その多くに手紙が添えられていました。

取り残された地域へ 今後とも継続します

神割崎のある宮城県南三陸



町は津波の被害が大きく、いまだ250人近くが行方不明のままです。中心地では小さな仮設商店街はあるものの、津波で歪んだ線路や鉄筋が露出した建物以外には、海のおいがる水たまりがある程度。土地の再生に埋めくりが必要のため、商店などの復興のめどは立たないといえます。中でも今回会場となった神割地区は南三陸町と石巻市の境目にあるため、支援の手から取り残されました。神割崎オートキャンプ場の管理をする及川福子さんも「一年始めから、ようやく瓦礫の撤去が始まったんです」と言います。買い物をしようにも車で30分

靴やバッグ、衣服など男女別にコーナー分けされた会場内。1万3,000円ほど集まった参加費（ひとり100円）は町の復興資金として寄付されました。

送付方法

事前連絡は必要ありません。
下記送付先にお送りください。



受付可能品

衣類・アクセサリ・靴・バッグ

※上記以外の雑貨は仕分けできないため、お送りをお断りしております。
※キャスターつきのバッグは除く



送付先

〒020-0891

岩手県紫波郡矢巾町

流通センター南1-9-20

株式会社ドンドンアップ おひきとり係



お問い合わせ先

ドンドンアップ 盛岡本社

019-621-8250

(平日10時～17時)

※衣類をお届けいただいた後に
個別のご連絡はさしあげておりません。
あらかじめご了承ください。

以上かかる中心地へ出なければならず、中心地に出て品ぞろえの少ない小さな商店しかなく、大手スーパーなどはありません。「神割崎の仮設は16世帯と規模が小さいため、移動販売車が来て必必需品を揃えるのがやっとです」と自治会会計の阿部徳治さんは教えてくれました。

現在、神割崎に暮らす8割以上が高齢者世帯。「高齢者ばかりでは長時間の車移動も難しく、このような支援はありがたい」と阿部さん。もともと過疎化の進んでいたこの地区は、さらに子世帯の地域離れが加速したといえます。

「震災によって神割崎のように取り残された地域はまだあります」とドンドンアップ広報の小野寺夕貴さんは話します。「商店や働き口がなくなり、ますます過疎化が加速した地域では、最低限の生活用品を手に入れるのがやっと。私たちはそうした場所にと、継続した支援を行いたいと考えています。そのためにも、これからも不要となった衣類を送ってほしいと小野寺さん。「プロである私たちが仕分けをし、被災地に届けます。支援とならなければ、実店舗や海外で利用するなど、無駄なく活用させていただきますので、ぜひお送りください」